RNC 西日本放送ラジオ番組

CHIT CHAT RADIO 子育て CHAT ROOM

2023年2月20日15時21分～15時43分

こころと身体の性に違和感があるトランスジェンダーについて学ぶ

―鈴木裕美先生です。こんにちは。

（鈴木）こんにちは。

―こんにちは。よろしくお願いします。

（鈴木）よろしくお願いします。

―今日は鈴木先生に質問が届いているので、まずはそちらご紹介ください。

―はい、ご紹介いたします。ラジオネーム「ゆず茶」さんからいただきました。

小学六年になる姪っ子のことで相談があります。妹からの相談で知ったことですが、どうも心が男の子のようで今の生活がしんどいみたいだと。もともと活発で髪はショート、自分のことを俺と呼び、二歳上の兄の影響か、小学校も短パンにポロシャツで通うことが多かったので、あまり気にしていなかったんですが、中学の制服を買いに行く時にセーラー服は嫌だと渋って学校も行きたくないと言い出しました。

で、よくよく話をしますと、女の子であることに苦痛を感じているそうで、妹は子どもの気持ちを尊重したいと思いつつも、これから多感な時期を迎える中学校生活の中でセーラー服を着ないということでいじめられないか、先生にはどのように伝えればいいのか。で、生理はまだのようですが、これからの体の変化は受け入れられるのか、実際の生活の中で不便になることはないのかなど、そもそもどう子どもと向き合っていけばいいのか戸惑っているようです。

そして本人もこれは個性というものなのか、トランスジェンダーなのか、そこを知りたいような知りたくないような気持ちもあるということなんですね。まずどこに相談すればいいのか、もしトランスジェンダーならこれからの生活をどうすればいいのか、アドバイスをお願いしますということでいただきました。

―ありがとうございます。先生はこう言った相談は、これまでありましたか？

（鈴木）いや、ないんですよね。初めてで困っちゃいました。

―ええ、そうなんですよ。そこでなんですね、京子さん。

―はい、そうなんです。今日は鈴木先生が前から会いたかったというところもあり、福井瑞穂（ふくいみずほ）さんをスタジオにお迎えいたしました。こんにちは。

―こんにちは。よろしくお願いします。

（福井さん）よろしくお願いします。

―何度も西日本放送ラジオにはご出演いただいておりますが、改めて自己紹介をお願いします。

（福井さん）はい、私は「あしたプロジェクト」という団体の副代表をしております、福井瑞穂と申します。私自身がトランスジェンダーの当事者で、先ほどの相談者の方に少し似てるところもあるかもしれません。出生時の性別は女性でした。今は性別適合手術を受けて、戸籍上の性別も男性に戻して生活を送っています。県内でＬＧＢＴＱを含めた多様な生き方を認め合う活動をしていて、十代の方からの相談や、まさにこういう保護者さんからの相談も日々受けています。

―ではこのゆず茶さんからの相談ですが、ここからは福井さんも含めてお二人でお願いします。

（鈴木）ぜひ、教えていただきたいですね。福井さん、いかがでしょうか？

（福井さん）まずは髪型がショートで活発で、自分のことを「俺」と自称してますよね。自分自身も小さい時は、女の子は「私」と言いなさいと小学校で先生に言われて、自分にはしっくりこないなと、違和感がありました。

―小学何年生ぐらいの時に？

（福井さん）一年生の時に男の子は「僕」、女の子は「私」と言いましょうと学校の先生に言われたんですけど、どうしても言えなくて、自分のことを「こっち」と呼んでいました。

―なんか、自分の中での折衷案というか？

（福井さん）そうです。

―そして服装も活発に動きやすい格好、短パンにポロシャツとか。で、中学生になるので制服を買う時期ではあるんですが、どうなんでしょう？今って女の子はセーラー服、男の子は学ランとかいうのは緩和されてるんじゃないかなと思うんですけど。いかがですかね？

（福井さん）そうですね。今まではセーラー服と学ランというようにガッツリ二分化されてましたが、今はジェンダーレス制服を選べたり、体操服で登校できたり、様々な配慮がなされて

いる中学校が高松市内でも結構多くなりました。女の子は必ずセーラー服じゃないと駄目ということではなくなってきてますよね。

―ただ全部が全部、どっちでもいいよっていうところまではいってないんですか？

（福井さん）そうですね、学校によって選べるか選べないかとかありますね。

（鈴木）それは学校の理解の問題なんですか？

（福井さん）学校の理解というより学校の取り組みの問題ですかね。費用もかかることですのですぐに取り組めないという場合もあります。ですが、例えば三豊市ですと、三豊市の全中学校で同じジェンダーレス制服を導入しています。高松市だとジェンダーレス制服の導入はその学校によります。リボンかネクタイを選べるとかも含めてですけど。

―ズボンでもスカートでもいいようになってますよね。

（福井さん）そうですね。

―じゃ、高松はまだまだこれからなんですね？

（福井さん）そうですね、どんどん進んできて、この次の春からというところもあるんですが、まだまだ全ての学校ではないので、不便を感じる方もいらっしゃるかなと思いますね。

―このゆず茶さんの姪っ子さんがどちらにお住まいかはわかりませんが、ただセーラー服が嫌だから学校も行きたくないと言い出されているというのは可哀想な気もします。女の子であることを苦痛に感じているそうですが、どうなんでしょうか？セーラー服を着ないということでいじめられないかなど、先生にはどのように伝えればいいのか。それと体の表面的な変化や体の中の変化などいろいろあると思いますが、このあたりはどうでしょうか？

（福井さん）そうですね、まずいじめられないかということですが、この方は小学校六年生ですね。私は小学校四年生から六年生まで一緒に講演会を行うことが、年間何回かありますが、私自身の話をするんですね。すると、六年生の感想文の中には「そういう人もいるんだと初めて知ったけど、困ってることや苦しいことがあるなら、話を聴いて力になりたい」とか、「その子が男でも女でもどんな性別でも、友達だから変わりなくこれからも接していきたい」という前向きなメッセージを感想に書いてくれる子がいるんですよね。だからきちんと知る機会をまず学校に設けてもらうように働きかけるのはとてもいいんじゃないかなと思うんですね。

あと、いじめられるかもしれないという心配事や困り事を先生に伝える時に、学校でも性の多様性を教える授業や講演会をしてほしいと提案するのもいいと思いますね。また、重要なのは、この姪っ子さん本人に先生に話をしてもいいかをきちんと確認してから、先生に伝えること。やっぱり本人の意思を確認することが一番大事だと思いますね。

—今はジェンダー教育が、小学校の頃からもう定着しているものなんですか？

（福井さん）そうですね。それも学校によります。教科書も出版社によってはＬＧＢＴを取り上げているものもないものもある。全ての子どもに知る機会が平等にあるわけではないんです。

—今、お話を聞いてますと、我々大人の方が固定観念や先入観を持っていて、子どもの方が本当に純粋に人と人という所で見てるんだなという印象を受けました。

（福井さん）そうですね。本当に、素直に受け止めてくれます。すごく真剣に聞いてくれているという印象をここ数年、小学生に話してきて感じます。

—学校の受け入れや対応、体制っていうのは徐々に整備されては来てるんですか？

（福井さん）そうですね、先ほどジェンダーレス制服の話をしましたが、文科省からもトランスジェンダーやＬＧＢＴの子どもにちゃんと対応してくださいよという通知も出ていますので、先生方もＬＧＢＴの子ども達がいるというのは認識しています。ですので先生に相談して、「え、何それ知らん」ということは、この令和の時代にはないんじゃないかなと思っています。

—ということは、配慮してほしいことがあればお願いすると、配慮義務とまでは言わないくても学校側はそれに応えるようには動いてくれるってことですね。

（福井さん）そうですね、本人の意向やどこまで何を希望するかにもよりますし、学校側ができることできないことはあると思います。ですが、相談すればできる範囲のことは学校もきちんと対応してくれるような印象ではあります。

—だから、その辺りはひとつひとつ懸念がクリアされますよね。学校に本人の同意を取った上で言っても、不都合なことはないということで、学校生活の中では一つ安心ですよね。

（福井さん）抱え込まずにぜひ相談していただきたいなと思います。

—そして、姪っ子さんが第二次性徴で体の変化が起こるわけですが、その時はどのように周り

が向き合っていくのがいいんでしょうか？

（福井さん）小学校六年生だと体つきもどんどん女性らしくなったり、月経がきたりといった変化があって、トランスジェンダーでなくても戸惑いが多い思春期に入っていくと思います。月経が来た時は自分自身もそうでしたが、すごく悩んで誰にも言えませんでした。「いつでも聞いてね、困っていたら言ってね」っていう雰囲気づくりをご家庭の中でしていただけたら、姪っ子さんが少し安心できるのかなとも思いますね。

（鈴木）親の方も子育てしながら、なんか違うなって感じるかもしれませんね。例えば上の子と好みや言動が違うことで戸惑われたりすると思います。学校ではこういう教育の機会があって気づけたりすると思いますが、家庭の中だと案外情報がなくて、なんか違うと思うだけで、子どもが悩んでいることに気づかないかもしれないなと。どうでした？親御さん。

（福井さん）私自身が昭和五十九年生まれなので、それこそＬＧＢＴっていう言葉はなかったです。当然自分の両親もＬＧＢＴという言葉を知らなかったんですが、三つ上の姉のお下がりのスカートなんて絶対履きたくないと言ったり、お土産物屋さんで刀をねだったりしていました。やっぱり上の子とは違うなと思っていたとは思いますが、ありがたいことにうちの両親は自分のことを否定しなかったので、今命があるのかなとも思ったりもします。

（鈴木）親として大事なことは、まず、否定しないということでしょうか。

（福井さん）そうですね、やっぱり否定しないって大事だと思います。

―でも、それを告白されたら、まず驚いちゃうと思うんですけど、その驚くこともやっちゃいけないんでしょうか？

（福井さん）感情を押し殺すことはなかなか難しいと思います。最初にカミングアウトした時は、うちの母親も実際驚いたと思います。ただ驚いただけではなく、その後いろいろ図書館に行って本を借りて読んでくれ、分かろうとしてくれている姿勢が子どもから見ても分かりました。そんな姿を見て、困ったことがあったら母には言ってもいいかなと思うようになりました。

（鈴木）なるほどね。本当にその状況にない人は絶対「わかる」ことはないと思うけど、やっぱり分かろうとするその態度が大事なんですよね。

（福井さん）そうですよね。

—これは鈴木先生がいつもおっしゃってる、向き合うってことにも通じるかもしれませんよね。

（鈴木）そうですよね。向き合うことは、理解しようと努めることですから。

—見てくれていると思うと信頼感が持てて、何でも話ができるっていうことになりますよね。

—そうですね。だからカミングアウトされてびっくりしてしまうのは、人間の素直な感情なのだから仕方ない。その後が大事ということですね。まずは否定しないで知ろうとする、理解しようとする。親御さんの知識を深めようとする態度が安心感にも繋がったんですね。

（福井さん）そうですね、私たちの団体にも寄せられる声の中に、テレビやネットを見て、トランスジェンダーの人を笑いものにしたりする家庭だと居づらくなる、言いづらくなるという子どもが割とたくさんいます。でもうちの場合はそういうのはあまりなくて、分かろうとしてくれたことが子どもなりに分かったので、安心に繋がりましたね。

—ラジオネームゆず茶さんの相談内容に、どこに相談すればいいですかとあるんですが、福井さん、「あしたプロジェクト」に問い合わせていただいてもいいですかね？

（福井さん）もちろん「あしたプロジェクト」は SNS 等もやっておりますので、いつでもメッセージ送っていただきたいなと思います。

—後は専門の医療機関などはあるんですか？

（福井さん）香川県内では専門の医療機関というのは今のところはないんですが、岡山大学病院が中四国の中で一番大きいジェンダーセンター、ジェンダークリニックを構えています。性別の違和感や悩みを相談できるので、専門の医療機関を受診してみてもいいのかなと思います。

—心だけじゃなく、この体の変化についてもし気になるということであれば、そちらの方もお問い合わせいただければと思います。

—今日はゆず茶さんのご相談を通じて私たちも学びがありましたよね。

（鈴木）はい、本当に。今後こういうお悩みが来た時は、どんと構えて福井さんを紹介したいと思います（笑）。

（福井さん）いやいや、でも、逆にそういうことを相談できるドクターがいらっしゃらなかっ

たんで、ぜひ先生にも相談、私からもさせていただきたいと思います。

—ぜひぜひ、これで輪が広がっていくといいですね。

（鈴木）そうですね。香川県も岡山大学のようにジェンダーセンターができたらいいですね。

—そのあたりの環境づくりはちょっと鈴木先生…

（鈴木）そんな力はないけど、ちょっと声を上げていくことはできるかもしれません。

—そうですね。

（福井さん）ぜひお願いします。

（鈴木）必要なことですもんね。

—ぜひぜひ、県ごとにジェンダーセンターが当たり前に存在するようになれば、もっと相談しやすい環境になっていくんじゃないかなと思います。ちなみにジェンダーセンターってどういう先生方がいらっしゃるんですか？

（福井さん）精神科、産婦人科、泌尿器科、形成外科の先生方が協力し合っているのでいろんなことを相談できますね。体のことも心のことも。

—ぜひ頼ってみるのもいいと思います。ということでゆず茶さん、ぜひ参考にしていただけたらと思います。とういうことで今日はこのメールをきっかけにいろんなお話を展開してきました。福井瑞穂さんどうもありがとうございました。香川大学医学部助教の鈴木裕美先生、今月もありがとうございました。

（鈴木）ありがとうございました。

（福井さん）ありがとうございました。

—ありがとうございました。

—以上、子育てチャットルームでした。